



# おのみ



令和4年度 10月号  
志布志市立尾野見小学校

## 本がもっている力とは？

校長 宗岡 克英

10月8日（土）に児童文学作家椋鳩十の孫、久保田里花さんに「本がもっている力とは？」と

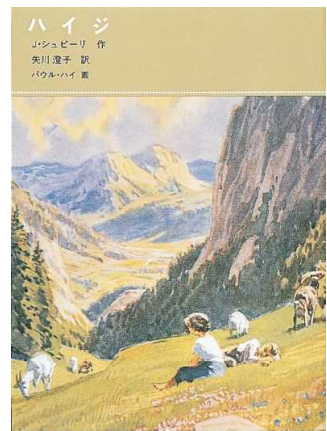


題して講演をしていただきました。久保田さんは椋鳩十の次男の長女で、椋さんが亡くなるまで一緒に暮らしていました。講演では、椋鳩十が児童文学作家になったきっかけを中心に、椋の人柄や思い出について話してくださいました。講演の内容を少し紹介します。

おくびょうで、気が弱くて、何をしてもうまくできない男の子だった彦穂（椋鳩十の本名）の運命を大きく変えたのは、小学生のときに先生が貸してくれた本との出会いです。身近で死を目の当たりにした彦穂は、先生に「死ぬってどういうこと？」とたずねます。その先生は、

生きることの美しさがわかる本「ハイジ」を貸してくれます。生きることの美しさを感じさせることで彦穂の問いに答えようとしたのです。「ハイジ」の中に、おじいちゃんが夕やけの美しさについて語る場面があります。「夕やけはなあ、太陽が、山々に向かって、さよならのあいさつの印なんだよ。だからあんなに美しいのさ。」

「ハイジ」を読んでいた彦穂のまわりもちょうど夕やけに包まれていました。彦穂は、その夕やけに感動します。ハイジの見る夕やけと自分のまわりを包む夕やけが重なり、自分が今まで見ていた世界が違って見えてきます。彦穂は、自分がすばらしい世界に生きていることに気づきます。「ハイジ」が世界の見方を変えたのです。「気がついたときには、わたしは文章を、それも自然を主体としたものを書いて生きる人間になっていた。あの日の感激が、わたしの運命の窓を開く鍵であったと思う。」と椋は後年語っています。「感動は人生の窓を開く」という椋鳩十の直筆の言葉が残されています。彦穂が「ハイジ」に出会って感動し、運命の窓が開かれたように、皆さんも素敵な本に出会えるといいなと思います。



講演会の最後に吉留杏莉さんが「椋鳩十の名前の由来を家族に教えてあげたい。たくさんの本を書いているようなので図書館の本は全部読んでみたいと思います。」とお礼の言葉を述べました。久保田さんが帰る前に講演のお礼として、栗の実を差し上げました。この栗の実は、先日の台風14号で倒れた体育館裏の栗の木が最後に残したものです。その由を伝えたとこ数日たって、久保田さんからお礼のメールが届きました。「栗を毎年拾って頂いていたこと等しい、児童の皆さん、自然豊かな素晴らしい環境にいらっしやると思いつつ、帰ったところでした。人の情緒は、自然が育む、自然をむやみに破壊してはいけないと祖父は言っていましたが、豊かな自然の中、感受性を育てている子どもさんたち。素晴らしい本との出会いで、さらに深まる事を願っております。貴重な栗の生命、ありがたく頂きました。」

椋鳩十の心に触れ、そして椋鳩十の心を私たちに伝えようとする久保田里花さんの思いに触れることができた素晴らしい講演会でした。

